

---

# 生活空間

tethqr

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

生活空間

### 【コード】

N0299M

### 【作者名】

tethqr

### 【あらすじ】

ふつうのふたりのほのほの日記

鬱蒼と茂った、光も届かない森の底を、無数の木々を雑草を虫をかき分けかき分けかき分けかき分け押し進むと、大量の紫の苔でおわれた、倉庫のようなとても大きい家があった。

＜倉庫のような＞と言うのも、その家は立方体と表現できる形状のものであったし、一様に並べられた苔がその表面にあるはずの凹凸を全く消してしまっていたからだ。

窓や扉がどこにあるのか、いや存在するのかどうかさえ、外見からは判断出来ない。

しかし、それは紛れもなく家である。

家にふさわしくないのは外見のみであって、仮に壁を通り抜け壁の内側を見た者がいるとすれば、その人間が文明生活を送っている限り、どうあがいたところでこの建物は家としか表現できないだろう。なぜなら、この壁を隔てた向こう側の空間には、生きた人間が存在しているからだ。

その人間は食事、睡眠、排泄の行為を行い、生命活動を維持している。

掛け布団を跳ね飛ばし、電気をつけ、パジャマを脱ぎ、少し時間をかけて服を選び、棚から取り出し、着替え、椅子に座り、バスケットからクロワツサンを取り出し、食べる。

以上一連の行為を人類が行う密室空間を、家以外になんと表現できないよう。

「私はクロワツサンと言うモノが嫌いなのですよ。なんとも脂っこい。そのくせ食感だけはあっさりとしていて、なんとも腹の中の知れない人間のような、そんな印象を受ける。

よくいますよね、やたら初対面ではサバサバしている風なのに、仲良くなったとたんにキャラ変わる奴。その典型ですよ」

「誰に話してんだよ」

「お前しかいないだろう」

「寝てる人間にそんな下らない講釈垂れる奴がこの世に存在するとは思ってもよらなかったよ」

「寝ている人間が自発的に応答してくれる、なんてのもこの世にあるべきではない現象だと思っただが、どうだろう」

「それは前提が間違っているからだよネコミミくん。僕は寝てなんかない」

少し大きめの木製椅子に座るその女性は、胸にネコミミのプリントされたTシャツを着ていた。

「くねこまんまみたいな顔ですね 御主人様」と背中にプリントしてある。いい趣味をしている。

「ならば君の第二声における、寝ている人間に云々という発言内容も同様に前提が間違っているではないか。」

「いやいや僕の方はどうしようもなく正解だよ。寝癖くんが私を批判したのはわかるけれども、根拠なき批判は受け付けられないなあ」

少し大きめの木製椅子に座るその女性は、寝癖によってその長髪を酷くかき乱していた。

会話中もクロワツサンを食べ続けていた彼女であったが、数回ほど、髪の毛も同時に咀嚼していたのである。

「どうしようもなく正解ではないだろう。ならば私が不正解の判断を下そう」

「採点者は二重まぶた君なのかい。なら僕はそれに不正解の判断を下すよ」

少女は二重まぶただった。

「二足歩行君にとって、僕は寝ている存在だったはずだよ。なんせこの時間に布団の中にいて、さっぱり動かないのだからね。」

しかも僕は普段この時間に起床することはほぼ無い。

従ってくちびる君が私に話しかけることなどありえないのだよ。

クロワッサン君に私が眠りから覚めているか否かを判断する事など出来なかったはずだからね。

なにせこの部屋は四方を完全に封鎖されている。

まあ、僕が激しくいびきをかく人間だったとしたら話は別だけれども」

クロワッサンを食べ終えた彼女はその破片を唇に大量に張り付けていた。

「ならばなぜ私が現在ネコミミTシャツを着ていると知っているのだ。」

「それは僕がふすまの隙間から低脂肪牛乳君を見ているからさ。」

少女はコップに注いだ牛乳を飲み干した。

「ふむ、ならば私も、その隙間から君の挙動を観察していたと言うことにしよう」

「そんな眼力がバブル君にあったとは、驚きだよ」

少女は食器を洗っていた。

「今にも弾けそうな名前だな」

「じゃあ私も朝食といこうかな」

襖の向こうで、うなり声と同時に、床の軋む音がした。

「クロワッサンならもう無いよ」

「3つはあったはずじゃないか。嫌よ嫌よも好きの内ってかい」

「だってあなたもクロワッサン嫌いでしょ」

「それでも今朝はクロワッサン食べたかった気分だよ。手ぐし君がそこまで嫌悪するならむしろ食べてみたくなるさ」

少女は手ぐしで髪をいじくっていた。

「嫌悪ってほど嫌いじゃない。君が嫌いだ嫌いだと言うから、嫌ってみただけだよ。根拠を上乘せしてみただけだ。」

「ふむ、では僕は何を食べればいいのか」

「牛乳ならあるぞ」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0299m/>

---

生活空間

2011年1月25日03時08分発行